

Elias to Christ

— ランスロット・アンドルーズの「ルカによる福音書」による火薬陰謀事件記念説教 —

高 橋 正 平

序

1605年11月5日の過激派カトリック教徒が計画した国会議事堂爆破によるジェームズ一世殺害未遂事件はジェームズ一世がイギリス国王となってわずか2年しか経過していなかったが、王自身を驚愕させた事件であった。ジェームズ一世はこの事件後国内の説教家に事件についての説教を行わせ、事件の風化を防ぐと同時に何よりも王殺害を狙った事件がいかに凶悪なものであるかを民衆に周知徹底させようとした。ジェームズ一世の意向を十分に汲み取った説教家にランスロット・アンドルーズ (Lancelot Andrewes) がいる。アンドルーズは、1606年から1618年まではほぼ毎年11月5日に火薬陰謀事件記念説教を王の前で行っている。アンドルーズは、ジェームズ一世の意向を沿い、時にはジェームズ一世の政策や王が固執した王権神授説の宣伝を行い、王のスポークスマンの役割を十分に果たす。火薬陰謀事件説教で説教家が行うべき任務ははっきりしている。事件を計画したジェズイット批判、ジェームズ一世の神の慈悲による奇跡的救出、この2点が説教のメインとなる。特に後者の神によるジェームズ一世救出について説教家は聖書から事件と類似した箇所を探し出し、それを火薬陰謀事件に適応し、事件の糾弾にあたる。聖書の権威を借用してジェームズ一世擁護にあたるわけである。火薬陰謀事件記念説教において興味深いのは各説教家が説教で取り上げる聖書である。なぜかといえば火薬陰謀事件説教ではアンドルーズ以外の説教家を含め、ほとんどの説教家は旧約聖書の一節を取り上げているからである。1605年から1651年までの火薬陰謀事件記念説教は32編あるが、そのうち旧約聖書を基にした説教は27編で残りの5編は新約聖書の

一節を基にしている⁽¹⁾。アンドルーズは1618年まで合計10編の火薬陰謀事件記念説教を行っているが、そのうちの1609年と1617年の説教だけが新約聖書の「ルカ伝」を基にしている。火薬陰謀事件説教がほとんどが旧約聖書に基づいている事実は注目に値する。たとえば、火薬陰謀事件直後の説教でウィリアム・バーロー (William Barlow) のは「詩篇」18篇50節を題材とし、主がダビデを戦いから救出してくれたことをジェームズ一世が火薬陰謀事件からの奇跡的な救出に重ね合わせ、神の慈悲を強調する⁽²⁾。アンドルーズは最初の火薬陰謀事件記念説教を1606年に行っているが、そこで彼が取り上げた聖書の一節は「詩編」118篇23節-24節であった。118篇はユダヤ人の敵の陰謀からの救助と死に至る神による懲罰からのユダヤ人救出を扱い、その感謝を神に歌っている。「詩編」の内容も神の慈悲による危機からの救出という点では火薬陰謀事件と同様で、アンドルーズは「詩編」と火薬陰謀事件との関連性からジェームズ一世を擁護する⁽³⁾。あるいはジョン・ダン (John Donne) の火薬陰謀事件記念説教はどうか。ダンが選んだ聖書の一節は旧約聖書「哀歌」4章20節の「主の油注がれた者、わたしたちの息吹／その人が、彼らの罫に捕らえられた。」であった。ダンはこの一節をジェームズ一世に適応し、「主の油注がれた者、わたしたちの息吹」をジェームズ一世、「わたしたち」をイギリス国民、「彼らの罫に捕らえられた」をジェームズ一世がカトリック教徒の火薬陰謀事件に巻き込まれたこととした⁽⁴⁾。このように火薬陰謀事件記念説教には旧約聖書からの一節を基にした説教が多いことは注目すべきことである。それはなぜであったか。ユダヤ人は様々な困難に遭遇しても依然として神から見捨てられることなく、窮地を脱し、民族の繁栄へ至る。そのユダヤ人とイギリス人と重ね合わせる説教手法はいやがうえにも国民感情を高揚させたからである。なにしろイギリス人はユダヤ人と同じく神の選民であるという考えが一般人に浸透していた時代であった。旧約聖書による説教は計り知れない説得力と安堵感をイギリス国民に与えたにちがいない。そのような風潮のなかでアンドルーズはあえて1609年に「ルカ伝」9章54節-56節に基づく説教を行った。アンドルーズのもう1編の「ルカ伝」に基づく説教は1617年に行われており、他にはジョン・ハケット (John

Hacket) が1624年, ジェレミー・テイラー (Jeremy Taylor) が1638年, アンソニー・バージェス (Anthony Burges) が1644年にそれぞれ新約聖書に基づく説教を行っているが, アンドルーズの「ルカ伝」による火薬陰謀事件説教は事件4年後の1609年である。火薬陰謀事件の衝撃がまだ覚めやらぬ1609年にあえてアンドルーズが新約聖書をもとに説教を行った真意はどこにあるのか。そもそも旧約聖書による説教と新約聖書による説教には何か違いはあるのだろうか。アンドルーズはいかにして「ルカ伝」によって火薬陰謀事件を批判しているのか, また「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応はいかなる効果をあげているのか, これらを中心にしてアンドルーズの説教の真意を本論で解明していきたい。

1. アンドルーズの「ルカ伝」 9章54節－56節解釈

旧約聖書を基にした火薬陰謀事件記念説教ではイギリス人が旧約聖書のユダヤ人と対比され, それらの説教は幾分扇情的な側面がなきにしもあらずという感を受けるが, アンドルーズの新約聖書に基づく説教はどうか。アンドルーズが「ルカ伝」を取り上げた理由は何だったのか。「ルカ伝」54節－56節は以下の通りである。

And when His disciples James and John saw it, they said, Lord, wilt Thou that we command that fire come down from Heaven, and consume them, even as Elias did? But Jesus turned about and rebuked them, and said, ye know not of what spirit ye are. For the Son of man is not come to destroy men's lives, but to save them.

イエスは救いの成就のためガリラヤからエルサレムへ向かう途上であった。途中イエスはサマリアを通過したが, ユダヤ人とサマリア人は交流がなかったので, サマリア人はイエス一行のサマリア通過を喜ばず, 宿泊を提供しなかった。サマリア人からの冷遇に弟子のヤコブとヨハネがサマリアの町を天から火を呼び集めて焼き滅ぼすことをキリストに提案する。しかし, イエスは彼らに同意

せず、彼らを叱り、そのためサマリアは天からの火による焼却を免れる。イエスはなぜヤコブとヨハネの提案に同意しなかったのか。それはヤコブとヨハネの行動は「無知」によっているとイエスは考えたからである。アンドルーズによれば弟子達の無知は以下の通りである。

- (1) ヤコブとヨハネはサマリアを焼却する根拠に旧約の預言者エリヤを先例に挙げる。

神からのアハジヤ王への死の宣告をアハジヤ王に伝えるエリヤを捕らえれるために遣わした50人の長と50人の部下を天からの火により滅ぼした先例がある。神の使い手であるエリヤへの不遜な行為により、アハジヤ王から遣わされた100人が天からの火より滅ぼされた。アンドルーズは、“the authority of so great a Prophet is enough to do no more than he did upon like occasion.” とすら言う⁽⁵⁾。「かくも偉大なる預言者」の先例がイエスの弟子達にサマリア人への火による焼却を可能にせしめる。エリヤが行ったからイエスの弟子達も同様のことができるということである。しかも、エリヤの場合と比べて、「エリヤよりも偉大なる人」すなわちイエスが不名誉を被ったからエリヤの先例はもっともなことである。エリヤの先例があればこそイエスの弟子達は何の迷いもなくサマリア人を火で焼き滅ぼすことが可能である。

- (2) エリヤの「火」はアハジヤ王から遣わされた100人を殺害しただけであるのに反し、サマリアでは多くの子供と女性が焼却の対象となる。神は、「悪人」と「悪意のない人」を同時に滅ぼすことを許しはしない。エリヤは「悪意のない人」を殺害することはしなかったが、ヤコブとヨハネは善悪の区別をしない無差別殺人を提案した。だから弟子達の「エリヤが行ったように」という表現は正しくない。エリヤの天からの火の対象は「悪意のある人」だけであつたので、「ように」という表現はサマリア事件にはあてはまらない。もし「エリヤが行ったように」という表現に忠実に従うならばヤコブとヨハネもサマリア人のなかでもキリストに宿泊を拒んだ人達だけを「火」の対象にすべきであつた。だから実際は「エリヤが行ったように」ではなく「エリヤが行ったこと」とすべきであつた。

- (3) エリヤの行為には「特別な任務」があり、それは主の使いからアハジヤ王

は死を免れないと言われたことをアハジヤ王の使い手に告げることであった。だからエリヤの行動に対しては「国璽」とも言うべく主からの認可があった。しかし、ヤコブとヨハネに関しては、イエスへの宿泊拒否を理由にしてサマリアを焼却することはイエスから託された「特別な任務」ではなく、イエスからは何も要請はない。

- (4) 「エリヤが行ったように」はサマリア焼却の先例としては弱い。それは弟子達の無知によっている。弟子達は「火」によるサマリア焼却「行為」の許可をイエスに聞いているのに、イエスは弟子達の「霊」について答えている。だから「エリヤが行ったように」は「弱い根拠」にすぎない。弟子達は行為だけでなく霊もイエスと同じなければならない。イエスの霊がなければ「エリヤが行ったように」は何も行動の裏付けとはならない。
- (5) ヤコブとヨハネはエリヤと同じ霊であると言うかもしれないが、それは彼らの無知である。エリヤの霊はエリヤの時代にしか適応できない。エリヤの行為は彼の時代にあっては正しかったが、時代が変わり、エリヤの霊はヤコブとヨハネの時代には妥当性を欠く。エリヤの霊は今や時代遅れである⁽⁶⁾。
- (6) なぜエリヤは時代遅れか。これについても弟子達は無知である。“fiery Law”の下では「破壊する時」はあったが、今はキリスト到来の時代である。エリヤの時代には“fiery Law”は間違いとは言えなかったが、キリストの時代に“fiery Law”は通用しない。弟子達がサマリア焼却の先例としてエリヤを挙げたが、それはキリストの時代にはそぐわない。「人の子」キリストが到来したからにはエリヤは不必要となる。「立法者」も「預言者」も必要とされない。必要なのはただキリストだけである。「人の子」キリストが到来しているのにいまだエリヤの霊を身につけているのは弟子達のはなはだしい無知である。
- (7) ヤコブとヨハネがキリストの弟子でありながらエリヤを尊重するということはありえない。弟子達がエリヤかキリストかいずれの霊を身につけるかを選ばなければならないとすれば、それはキリストの霊である。キリストの弟子にはエリヤの外套と霊を脱ぎ捨てる必要がある。弟子と師は同じ霊でなければならないからである。しかもキリストの霊はエリヤの霊とは異なる⁽⁷⁾。

エリヤの霊がジュピターの雷電を運ぶ驚だとすればキリストの霊は鳩の霊であり、それはオリーブの枝を持って来る。怒りと破壊の人エリヤと異なり、キリストは愛を通して平和と救いをもたらす。だからヤコブとヨハネにキリストの霊が備われば、彼らのキリストへの提案も「雷電」ではなく「オリーブの枝」のにおいとなるはずである。キリストの弟子でありながらエリヤ的な考えに固執したヤコブとヨハネは大きな無知をさらけ出している。彼らは「新しい人」キリストの弟子でありながら、まだ「古い人」エリヤなしでは行動できない。「律法」「預言」の時代は去り、隣人への愛が救いのためには不可欠な時代である。なのにヤコブとヨハネは相変わらず、エリヤに行動の指針を仰ぎ、しかも、「隣人」サマリア人への露骨な敵意、容赦のない怒りを表す。これはキリストの弟子にはあるまじき著しい人間愛を欠いた行為である。ヤコブとヨハネにあって最大の無知は弟子達のキリストへの誤解にある。穏和な人キリストにサマリア焼却の許可を求めるという無知を弟子達は露呈している。

ヤコブとヨハネはサマリア焼却をイエスに提案する際に様々な無知をみせているが、彼らの個人的な無知としては彼ら自身の霊についての無知がある。

Never [Jesus] thinks the motion worth the answering, as being evil *ex tota substantia*, but rebukes them for moving it, rebukes the spirit it came from, rebukes them of ignorance of their own spirit;⁽⁸⁾

イエスは弟子達の提案には答えることはせず、ただ彼らがいかなる霊を身につけているかを知らないといりつける。弟子達はイエス同様旧約的な精神を捨て去り、新しい愛の精神を身につけているべきであった。しかし彼らは依然としてまだ旧約的思考に支配されており、新しい人間とはなっていない。彼らの無知はまたイエスがいかなる人であるのか、イギリスがいかなる使命を帯びて今エルサレムへ向かおうとしているのかさえ知らない。イエスの弟子達は新しい衣を身にまとう必要がある。イエスが彼らの提案に同意しなかった理由は彼ら

が同じ人間であるサマリア人を愛することができなかったからである。もし弟子達が彼らがいかなる霊から成り立っているかを知っていれば、彼らはサマリア人を天からの火によって焼き滅ぼすことをイエスに提案することはなかった。アンドルーズはイエスの弟子達を批判するが、それはすべて彼らの無知によると考えている。

弟子達の最大の無知は、彼らがいかなる霊の持ち主であるかを知らないことである。無知からはいかなる良い提案も生じてこない。知識なしでは良い祈りも崇拜も魂自身もありえない。アンドルーズからすれば火によるサマリア焼却提案は弟子達の「無知な崇拜」「盲目的信仰」「盲目的服従」⁽⁹⁾によるがゆえに、これらすべてはキリストにより叱責される。「ローマ人への手紙」を引用しつつ、アンドルーズは次のように言う。

Zeal, if it be not *secundum scientiam*, cannot be *secundum conscientiam*; matter of conceit it may be, of conscience it cannot be.⁽¹⁰⁾

ユダヤ人の律法遵守は彼らの神への絶対的服従を示してはいるが、彼らは正しい神の救いに関する知識は持ち合わせていない。知識を欠く熱心さは「きまぐれの問題」であり、「良心の問題」とはなりえない。弟子達の無知は彼らの行為についての無知ではなく、彼らの霊についての無知である。彼らは無知であるが故に「残虐な行為」を引き起こすところであった。アンドルーズは、多くの盲目的行動は行動を起こす人が自らの霊についていかに無知であるかから生じてきている、と言う。ここでアンドルーズが意味することはヤコブとヨハネは「新しい人」に生まれ変わる必要があったということで、それはとりもなおさず彼らがキリストの教えを身につけなければならないことを意味する。キリストの教えにより、新しい知識を得る必要があり、それを知りさえすればヤコブとヨハネはキリストと宗教が異なるからといってサマリア人を火によって焼き滅ぼすという提案をキリストにすることはありえなかった。一口で言えばイエスの弟子でありながらヤコブとヨハネは自分には無知で、自分達の行為も正しいと思いながらも実はそれはイエスの弟子にはあるまじきことだということを全

くわかっていない，ということなのである。ヤコブとヨハネはサマリア焼却を提案すべきではなかった。彼らにはイエスを冷遇したサマリア人に対し他にやるべきことがあったはずである。それは「ルカ伝」9章54節-56節の最後の一節，「というのは人の子は人々の命を滅ぼすためではなく，救うために来た」に明らかである。何のためにイエスはこの世に来たのか。何のためにイエスは神によってこの世に送られたのか。いかなる目的のために神はイエスの霊を形作ったのか。「ルカ伝」4章18節にあるように「主の霊がわたしの上におられる。打ちひしがれた人をいやし，捕らわれている人を解放するためである」。キリストが神からこの世に遣わされたのは「失われた人」「罪人」「貧しい人」を救うためである。「イエス」なる名前も「救い主」を意味し，彼は「子羊」であり「おおかみ」ではなく，「めんどり」であり「トビ」ではなく，「ブドウの木」であり「イバラ」ではない⁽¹¹⁾。柔和な，優しいイエスを「滅ぼすためではなく，救うために」この世に送ったのは神である。これ以外にイエスがこの世に来た理由はない。救い主としてのキリストをアンドルーズは再三強調する。ヤコブとヨハネは救うためにこの世に現れたイエスに対して無知であった，とアンドルーズは指摘する。イエスはサマリアで冷遇を受けたほかにも様々な冷遇・侮蔑・暴力・冷笑を受けた。その最たるものはエルサレムでの受難である。あるいは弟子のヤコブとヨハネは身の危険を感じると彼らはイエスを知らないときえ言った。もしそのたびごとに天からの懲罰が下っていたら，この世は「灰の山」になっていた⁽¹²⁾。しかしながらイエスは自らの逆境にあっても生命の危険があっても，彼の敵に対して憎しみを爆発させることはなかった。逆に彼が示したのは愛であった。イエスの使命は愛による救いである。救い主としてのイエスの強調はこの後のエリヤ批判とともにアンドルーズの説教の中心的テーマであるが，これらの問題は火薬陰謀事件へのアンドルーズの真意を解明する上で重要なテーマとなっている。

2. アンドルーズのエリヤ批判

サマリア人への冷遇に対しての弟子達の懲罰提案は彼らの様々な無知によるところが大きい。その無知で最もはなはだしい無知は弟子達がイエスの時代に依然としてエリヤを先例としてあげ、エリヤのごとく行動しようとしたことであつた。イエスの言うごとく、またアンドルーズの言うごとく、エリヤの時代は過ぎ去り、今はイエスの時代、新しい時代である。その新しい時代にあつては「律法」と「預言」はすでに過去の遺物となっている。イエスがいかなる目的のために現世に現れたのか不幸なことにヤコブとヨハネは知らなかつた。もし知っていたら彼らはイエスにサマリア焼却を提案することはしなかつた。イエスからすれば自分を敵にまわし、冷遇するサマリア人であればこそ尚更一層彼らは救いの対象となる。

ヤコブとヨハネがサマリア焼却はメシアとしてのイエスのみわざを邪魔する者は神からの罰を受けるのが当然であると考えたが、これから我々は何を知りうるのか。弟子達はイエスのメシアとしての使命をはっきりと理解せず、「眼には眼」的なサマリア焼却を提案する。それは弟子達の「無知」であり、「誤り」であり⁽¹³⁾、弟子達は「どのような霊から成っているか知らない」。つまり、イエスは「律法」や「預言」に代表される旧約の世界から「隣人愛」の世界に登場しているのであつて、罪人の救い主としてこの世に現れている。イエスの登場は旧約世界の終焉を意味している。ところがヤコブとヨハネはキリストと行動を共にしながら、キリストがいかなる使命を帯びてエルサレムに向かおうとしているのか全くわかっていない。彼らは依然として「力」による問題の解決を図っているだけである。精神的な「愛」の力ではなく、物理的な「力」によってサマリアの町を滅ぼそうとする。ここに弟子達の大きな誤りがあつたとアンドルーズは考えている。サマリア人のイエス冷遇の原因の一つがイエスとサマリア人との間の宗教上の違いがあつたことは確かである。しかし、宗教に違いがあるからといって弟子達が即座にサマリア人を焼き尽くすことは許される行為であつたか。宗教の違う相手を殺害することはイエスの考えには全く反する。だからイエスは弟子を叱責するのである。

This rebuke here of these will reach to all undertakers in the same kind. This *non perdere sed salvare* saves all our towns, cities, and states, from consuming by fire from any of Christ's company.⁽¹⁴⁾

イエスの使命は「滅ぼす」ことではなく「救う」ことである。上記の引用文における「同じ種類のすべての企て人」は火薬陰謀事件を考えると極めて示唆的なのである。イエスの叱責はサマリア人焼却提案者ヤコブとヨハネのみならず国会爆破計画者ジェズイットにまで及び、また「滅ぼすためではなく救うため」のイエスは「キリストの一行」からの火による破壊からすべての町、市、国家を救うとあるように、イエスは国会議事堂、ロンドン、そしてイギリスをも救う。ヤコブとヨハネ同様ジェズイットも旧約的な「眼には眼を」式な暴力で問題の解決を図ろうとしたが、アンドルーズは旧約的な問題解決よりもイエスを全面に持ち出す。旧約の「眼には眼を」からイエスの「隣人愛」が特に強調されていることに注目したい。サマリア人がイエスを敵視したようにジェズイットもまたジェームズ一世を敵視した。しかし、それは異なる考えを持つ他者への理解と愛情を欠いたことからくる行為で、本来のキリスト教信者の取るべき姿ではないとアンドルーズは考えている。

ヤコブとヨハネは怒りにまかせてサマリア焼却をイエスに提案するのではない。彼らからすればイエスにサマリアの焼却を提案した裏には先例がある。彼らは「エリヤが行ったように」と言ったが、この言葉へのアンドルーズの批判から我々はアンドルーズの「エリヤ」及び旧約聖書への見解を知ることができる。

「エリヤが行ったように」は「列王紀下」の1章9節-16節への言及である。イスラエルの王アハジヤは50人の長とその部下50人をエリヤのもとへ送ったが、天からの火によって彼らは皆滅ばされた。エリヤを捕らえるためであったと言われるが、それはアハジヤが欄干から落ちて病気になったのでその病気が治るかどうかをエクロンの神バアル・ゼベブに問うために使者を使わした。そのとき主の使いがエリヤに現れ、王の病気は治らず王は死ぬと告げよと言われる。エリヤに会うために使わされた50人の長とその部下50人は天からの火によって

滅ばされるが、これはアハジヤ王がイスラエルの神以外の神を信じたためである。いわば異教を信じた事に対する主からの罰であった。ヤコブとヨハネは「列王紀下」のこの一節を先例とし、イエスを拒否したサマリア人への天からの火による懲罰をイエスに提案する。それは旧約聖書でエリヤがすでに行っているからである。それはバアル・ゼブブという「はえの王」を崇拝していたイスラエルの王アハジヤが自らの死をエリヤから告げられるのを嫌い、エリヤを捕まえようとしたからである。神の命を受けたエリヤに対するアハジヤ王の不遜な行為のためである。エリヤへの行為は神への行為と見なされ、アハジヤ王は間接的に神へ反抗したと見なされる。だからアハジヤ王からエリヤへ使わされた50人の長と50人の部下は天からの火によって滅ぼされたのである。これに対し、「ルカ伝」の場合はどうか。エルサレムへの途上、サマリアでイエスがサマリア人から宿泊を拒否されたことは救い主イエスに対するはなはだしい侮辱であるとヤコブとヨハネは考えた。サマリアへ来る前、イエスは山上でモーゼとエリヤに会い、いわば「変容」を遂げている。救いの使命を旧約の二人から受けたばかりである。そのようなイエスへの侮辱は神への侮辱でもある。それゆえ、弟子達は天からの火によってサマリアの町を滅ぼそうとした。「列王紀下」でも「ルカ伝」でもいずれも神への抵抗が問題で、神に対する従順な態度が欠けている。「ルカ伝」の弟子達が先例としてあげた「列王紀下」の火による懲罰は主の意志による。しかし、イエスは敵を殺すことを目的として救い主となったのではない。イエスの使命は「救う」ことであり、そのためにイエスはこの世に現れた。弟子達のサマリア人への怒りも神の子たるイエスを思えばこそであるが、しかし、イエスから言わせれば弟子達には他者への愛が欠如していた。サマリア人はイエスを無視する人間であればこそさらに一層彼らに弟子達は愛情を注ぐべきであった。それこそがイエスの弟子に課せられた絶対条件であった。イエスに従う者には自己犠牲、他者への愛が必要である。ちょうどイエスが愛を注いだ人間は社会の最下層でうごめく人たちであったように、弟子達にもイエスを冷遇するサマリア人への愛情が必要であった。言うなればイエスの弟子達はいまだに旧約聖書的考えにとりつかれた人間であった。彼らにはイエスに従う者としての自覚が欠け、何よりも他者への愛が欠けていた。だからイ

イエスは弟子を叱りつけ、「君たちはどのような霊から成り立っているかわかっていない」と言うのである。イエスが弟子に要求したのはサマリア人への憎しみではなくむしろ愛であった。アンドルーズは、ヤコブとヨハネはなぜ彼らがイエスの弟子であるのか、またイエスの弟子であることは何を意味するのかを理解できないことを指摘したいのである。イエスが弟子達を叱責するのはまさしくこのためである。救いを特殊な民族、人種に限ったサマリア人と異なり、イエスは「万民の主」である。人種、民族に関わらずイエスを信じる者はすべてが救われる。イエスの登場によって律法の義は終焉を迎え、新しい信仰の時代が到来した。イエスの到来が律法の意味を失わせた。ところがヤコブとヨハネは相変わらず律法的精神を信奉し、イエス登場の意味を理解できないでいた。彼らは、救いは律法を遵守することによるのではなく、イエスを信じることによることを理解できないでいた。

「エリヤが行ったように」には様々な問題が含まれている。その最大の問題点は「エリヤ」がアンドルーズにとっては必ずしも敬愛の対象ではなかったということである。カリスマ的存在としてのエリヤはもはや過去の虚像にすぎない。アンドルーズにとってイエス到来の時代にあつてエリヤはもはや何ら権威的存在ではありえない。エリヤは破棄すべき過去の預言者であり、時代はイエスの時代である。ひとの命を滅ぼすためではなく、救うためにイエスは到来している。火薬陰謀事件でジェームズ一世が奇跡的に救出されたのはまさしくイエスのおかげである。「エリヤが行ったように」からエリヤからイエスへとアンドルーズの論点が移行していることを我々は知り、その移行のなかに我々はまたジェズイットへのアンドルーズの批判を見るのである。

3. 「ルカ伝」9章54節－56節と火薬陰謀事件

「ルカ伝」9章54節－56節と火薬陰謀事件とはどのような関係にあるのか。これは「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応という重要な問題を提起するが、これに関してアンドルーズは次のように言う。

And was not this, under the terms of James and John and a twon of Samaria, our very case this day four year? We were then in danger of destroying, and destroying by the same element, fire; and so near it we were, it would have been done as soon as a letter burnt. There were then that forwarded these fireworks with their *dicimus* all they could; and they said, they were disciples of Jesus' society. But Jesus shewed Himself to be in Heaven, of the same mind He was on earth. And He was then better to this town than His desciples, so to as He was better than the fathers of His society, and rebuked them too;⁽¹⁵⁾

ここでアンドルーズはヤコブ・ヨハネとサマリアとの関係を「我々の場合そのもの」と言っている。とすればサマリアの町焼却を提案するヤコブとヨハネはジェズイットで、サマリアは国会議事堂ということになる。バーロー、アンドルーズ、ダンの旧約聖書を基にした説教では聖書の火薬陰謀事件への適応は容易であったが、「ルカ伝」に基づく説教の場合、登場人物がイエス、弟子、サマリア人の3人となり、それらの関係は複雑である。そのためサマリア事件の火薬陰謀事件への適応がしっくりいかないが⁽¹⁶⁾、アンドルーズはサマリア=国会議事堂、ヤコブとヨハネ=ジェズイットと考え、両事件の関連性に言及する。「ルカ伝」に基づく説教は旧約聖書に基づく説教とは異なる印象を与える。「ルカ伝」ではキリストの「隣人愛」と「平和」が強調されるのに反し、旧約聖書に基づいた説教では火薬陰謀事件実行犯とその裏で糸を引くカトリック教会への容赦のない非難を浴びせられる。「ルカ伝」をテーマにした説教では敵であるサマリア人への批判は強くはない。イエスに宿泊を拒否したサマリア人に対し、イエスは弟子達に同意するどころか逆に弟子達を叱りつける。イエスを冷遇したサマリアへの懲罰が希薄化され、もっぱらキリストの「愛」が説かれる。イエスは自らを歓迎しなかったサマリア人にすら救いの愛はあることを示唆している。イエスのサマリア人への態度は言うなれば「敵」をも愛せよ、というイエスの根本思想に通ずる態度である。イエスを冷たくあしらったサマリア人にすらイエスの救済はある。イエスに対して拒否、無視、反抗を示すサマリア人にすら愛の姿勢を示すイエスの深い人間愛がこの一節のキーポイントであ

り、アンドルーズの説教も当然のことながらイエスの愛が説教の主題となる。しかしイエスのサマリア人への態度は火薬陰謀事件という前代未聞の事件との関連から考えると釈然としない。サマリア事件でのサマリアを火薬陰謀事件に適應すると、アンドルーズは火薬陰謀事件に関わった人達に対してすら温情を示すことになる。ジェームズ一世及びその家族、ジェームズ一世王朝の要人すべてを一瞬のうちに殺害しようとした実行犯に対してすらすべてを「許す」という慈悲をこの説教で表明することになる。ジェームズ一世が「平和」を特に重視したとは言え、火薬陰謀事件についての王の国会演説では事件糾弾の姿勢が強く反映されていた。とすればアンドルーズはジェームズ一世とは異なる見解をこの説教で述べていると言わねばならない。御用説教家と言われたアンドルーズがジェームズ一世の意向に逆らう発言をするとは考えられないし決してありえないことである。むしろアンドルーズはジェームズ一世の考えを一般民衆に説教という形で伝える人物であった。「ルカ伝」による説教では「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適應を考慮するとアンドルーズは陰謀事件関係者への寛大な処置を示唆することになる。これはジェズイット憎しの時代にあってはジェームズ一世殺害犯を許すという大胆しすぎる発言である。事件は既に関係者の処罰で終わりを告げ、火薬陰謀事件は一応は決着はついた。しかし、アンドルーズが言いたかったのは火薬陰謀事件実行犯への慈悲というよりは陰謀事件以降益々関係が悪化していったジェームズ一世とジェズイットとの対立解消であったろう。両者の和解なしにはジェームズ一世の繁栄はありえない。アンドルーズが敵にも愛を示したイエスを特に強調したのは火薬陰謀事件関係者よりはそれ以降のジェームズ一世を敵視するジェズイットだった。アンドルーズは弟子のヤコブとヨハネの様々な無知を指摘していたが、あの無知はまたジェズイットにも言えることだった。ヤコブとヨハネのサマリア焼却提案はジェズイットの国会爆破計画に相当する。ヤコブとヨハネはしかしながら、彼らがいかなる資格でイエスの弟子となっているか知らなかった。同様にジェズイットもなぜ彼らがイエズス会を名乗っているのかわかっていない。何よりもヤコブとヨハネ同様「力」によって事の解決を図ろうとしていたジェズイットはまさしく旧約的思考にとらわれていた。エリヤの時代は過ぎ去り、新しいイエスの時代で

あることを、力よりは愛が重要であることをジェズイットは知らなかった。すべてはヤコブとヨハネ同様ジェズイットの無知が引き起こした事件、それが火薬陰謀事件であった。イエスはサマリア焼却を提案したヤコブとヨハネを叱責し、サマリア人には憎しみよりは愛を示すようにと弟子達に促したように、ジェームズ一世殺害を計画したジェズイットもジェームズ一世への憎しみよりも愛を示すべきであった。しかし愛よりは憎しみによってジェームズ一世の爆破を試みたジェズイットは神からの叱責により、自滅の道を歩むことになる。アンドルーズがイエスの愛によるサマリア人救出を説教の主題に取り上げたのは頑な敵対者へ容赦のない行動をとるジェズイットにはイエス的精神が必要であることを言いたかったに他ならない。

アンドルーズは、イエスの精神により敵への愛をも示しているが、ジェズイットの背後に君臨するカトリック教会への態度はすべてが慈悲の精神であふれているわけではない。アンドルーズはまた、火薬陰謀事件説教のルールに従ってカトリック教会への批判も忘れはしない。次にアンドルーズのカトリック教批判を見てみたい。

4. アンドルーズのカトリック教批判

ヤコブとヨハネの無知から我々が知ることができる一つにアンドルーズは国会爆破を企てた過激なカトリック教徒ジェズイットの精神を挙げている。ここからアンドルーズはカトリック教徒への批判を始める。サマリア焼却をたしなめたイエスと異なり、カトリック教徒は逆に国会爆破計画を叱責することはしなかった。むしろその計画を認め、宣誓によって実行犯を拘束した。カトリック教徒はイエスとは全く逆の行動を取り、水をまくためではなく炎に油を注ぐことをしている。ここでアンドルーズはサマリア事件と火薬陰謀事件の両方に言及し、キリストは人を滅ぼす人間ではないこと及び我々は皆キリストと同じ考えを持たねばならないことを説き、国会爆破計画を企てたジェズイットにはこれらの点が欠けていたことを指摘する。アンドルーズはサマリアを論じながら最終的には17世紀のジェームズ一世のイギリスへと論を展開していく。説教

そのものがジェームズ一世の命を狙った火薬陰謀事件糾弾を目的としていたがゆえにそれは避けられない論の展開である。むしろ説教の聴衆はジェームズ一世をも含めて「ルカ伝」の解釈よりも、アンドルーズが「ルカ伝」を基にしていかに火薬陰謀事件及びジェズイット（広くはカトリック教徒）を批判するかにより大きな関心があった。

アンドルーズのジェズイットへの批判は最初にジェズイットの名から始まる。火薬陰謀事件の首謀者ジェズイットの正式名は“the Society of Jesus”である。これには二つの意味があって、一つはイエスの弟子達をも含む「イエスの会」ともう一つは国会爆破の実行犯の所属する「イエズス会」を指している。どちらも「イエス」の名を標榜しているが、その性格は著しく異なっている。「イエスの会」の目的は破壊することではなく、叱責することであるが、「イエズス会」の目的は破壊することであり、国会爆破提案を承認することである。柔和なイエスと異なり、イエズス会士は「熱心な、激しい、どう猛な精神」の持ち主である。しかし、イエスの現世への到来理由を考えれば当然の事ながらイエズス会もイエスの行動に賛同しなければならない。しかしながらイエズス会は国会爆破計画に象徴されるように政治の舞台にまで登場し、王の存在を認めない立場を取っていた。そのようなイエズス会が「イエス」を名乗るのであれば、それは「もうひとりのイエス」である魔術師・偽預言者のバルイエスス (Bar-jesus) である⁽¹⁷⁾。イエズス会は偽預言者に支配されており、真のイエスとは無縁の団体である。イエスはいかにサマリア人から冷遇されようとも彼らを破壊することはしなかった。旧約でもシオンは血を流してまでも築かれるべきであるというのは神の意志ではなく、新約でも神の教会が人々を灰にしてまでも築かれるべきだというのは神の意志ではない。つまり、争いを通して神の意志を現世に実現することは神の意志に反する。神はあくまでも平和的手段による自らの意志の実現を望む。ところがイエスの名をかたるイエズス会は流血によって彼らの意志を貫き通そうとする。アンドルーズからすればイエスを名乗る資格はなく、彼らはただ血によってすべてを解決しようとしているだけで、本来のイエスとは真っ向から対立する一派である。アンドルーズのジェズイットへの批判は痛烈である。アンドルーズは彼らを偽予言者バルイエススと関連づけ

ているが、この説教は全体的には激しい口調になっていないことを考えるとバルイエススとしてのジェズイットには驚きを感じえない。エリヤよりキリストを重視する「ルカ伝」説教でアンドルーズは争いを避け、平和をそのモットーとしたジェームズ一世に歩調を合わせているかのようであるが、それでもアンドルーズはジェームズ一世とジェズイットとの論争を考慮し、偽予言者バイエルススを持ち出し、ジェズイットへ批判を向ける。火薬陰謀事件記念説教では聖書に基づき実行犯を批判し、ジェームズ一世への賛辞と神への感謝が必ず含まれなければならなかったから、偽予言者バルイエスス導入もアンドルーズからすればそれは当然のことであった。

アンドルーズ「ルカ伝」の一節による説教の目的は聖書の解釈を試み、聖書を国会爆破事件に適応し、聖書の権威を借りてその事件を批判することである。聖書の解釈だけでは聴衆を満足させずいわんやジェームズ一世臨席の下での御前説教である。ジェームズ一世はいかにして説教家が聖書によって自分を擁護してくれるか、それがジェームズ一世の最大の関心事であった。だから説教家のなかには露骨な追従的な説教家も出てくる。いかにしてジェームズ一世を喜ばすか、いかにしてジェームズ一世に気に入られるかはこれまた説教家の最大の関心事であった。火薬陰謀事件記念やガウリー陰謀事件のようなジェームズ一世の生命にかかわる大事件の場合、説教家の任務はおのずから決まっている。それではアンドルーズは「ルカ伝」9章54節-56節と火薬陰謀事件をいかに関連づけているか。またその適応はいかなるものであるか。「ルカ伝」と火薬陰謀事件及び適応の成否が説教の優劣を決定することになる。

アンドルーズは説教の最後に至って火薬陰謀事件とサマリア焼却を論ずる。その前でも所々に両者の関係に言及しているが、説教の終わり近くでその関係に説教が移行していく。アンドルーズは火薬陰謀事件説教とサマリア焼却事件を比較し、火薬陰謀事件がサマリア焼却事件より大きな事件で、はるかに大きな神の慈悲がジェームズ一世に奇跡的な救いをもたらしたと言う。両事件はいずれも「火」による破壊であるが、神の意志が読みとれるのは火薬陰謀事件においてである。更には火薬陰謀事件を計画したジェズイットは自らその事件を暴露し、計画は未然に終わった。火薬陰謀事件について記した謎の書簡を解

読し、事件を未然に防いだのは他ならぬジェームズ一世自身であった。これはジェームズ一世への神からの特別な加護があったからである。サマリア事件と火薬陰謀事件を比較した場合、火薬陰謀事件でサマリア人に匹敵する人物は誰か。サマリア人はイエスを敵視し、冷遇した張本人である。火薬陰謀事件でジェームズ一世を敵視したのはジェズイットであるから、サマリア人=ジェズイットということになる。サマリア人と対立したイエスはジェームズ一世となる。アンドルーズからすればジェズイットかジェームズ一世のどちらが神の崇拜において「野蛮な儀式」を使用しているかが問題となる。それは当然ジェズイットである。サマリア人もイエスとは異なる宗教に従っていたからサマリア人=ジェズイットの図式は成り立つ。またどちらが「知らないことを崇拜しているのか」に関してジェズイットがそれにあたるとアンドルーズは考える。つまりどちらの宗教がよりエルサレムへ窓を開けているのかにつける問題である。エルサレムへ窓を開けるとはイエスの教えに忠実に従うことを意味するが、ジェズイットはむしろエルサレムへの窓を閉じ、狂信的信仰に拘束されている。ジェズイットとジェームズ一世との争いはエルサレムへ眼を向けることではなく、むしろジェームズ一世がローマへ眼を向けないこと、つまりジェームズ一世のローマ側への抵抗が争いの根元なのである。両者の争いは宗教的な次元で行われているのではない。ローマ側の俗権欲がそもそもの争いの原因であるとアンドルーズは言いたいのである。

火薬陰謀事件とサマリア焼却事件の被害の点において前者がよりもはるかに残酷である。爆破は突然に起こる。サマリア事件は天からの火により地面までの破壊であるが、爆破事件では建物の土台と地面にまで影響を及ぼす。更に悪いことには、サマリア事件では被害者はサマリア人だけであるが、火薬陰謀事件では「サマリア人」も「ユダヤ人」も同時に犠牲者になる。サマリア事件ではエリヤの先例があったが、国会爆破事件ではそれに匹敵する爆破計画はイギリスの歴史のなかで起こったことはない。事件の残忍性という点においては火薬陰謀事件はサマリア焼却事件とは比較にならない。

救いについてはどうか。サマリアもジェームズ一世も最終的には救われたが、サマリアの場合、救われたのは名もない貧しい町であったのに反し、火薬陰謀

事件ではサマリアとは量質ともサマリアとは比較にならないロンドンである。しかもサマリアには名だたる人物はいなかったが、火薬陰謀事件ではジェームズ一世を始め政府の要人がいた。サマリアではヤコブとヨハネ地上で口頭でイエスから叱責されたただけであるが、火薬陰謀事件では実行犯は神から叱責された。彼らは実行直前に奇跡的に自らの犯罪を暴露することになり、事件は未然に終わった。

火薬陰謀事件の奇跡的な失敗はキリストがイギリスを救いに来たからに他ならない。キリストは、実行犯の霊を心に留めることをさせず、彼ら自身の口から犯行計画を漏らさせた。彼らは自らの破滅の道具となってしまった。Monteagle への犯行を示唆する書簡をジェームズ一世に解読させたのは他ならぬ神である。ジェームズ一世はこの書簡から国会爆破計画を知り、王は奇跡的に難を逃れた。アンドルーズは、キリストがイギリスには単に「破壊するためではなく救うために」現れたのではなく、2回現れたと言う。一回目は「慈悲」からイギリス人を破壊するためではなく、救うために来、2回目は事件の実行犯を救うためではなく滅ぼすために来た。これは「裁き」からである。イギリスには2度もキリストの恩恵を被っている。火薬陰謀事件実行犯は奇跡によって滅ばされ、ジェームズ一世は奇跡によって救われた。これもすべて「神の右手が引き起こした」ことである⁽¹⁸⁾。アンドルーズはこのようにイギリスへの神の特別な配慮を述べ、それはとりもなおさずジェームズ一世への神の深い愛情の現れであると言いたいのである。

火薬陰謀事件記念説教は実行犯を非難すると同時にジェームズ一世及びイギリス賞賛、そして最後に神への感謝で終わらねばならない。この箇所は説教の最も重要なところであるが、アンドルーズはジェームズ一世の奇跡的救出賞賛及び神への感謝に関しては多くのスペースをさいてはいない。アンドルーズの筆致に激しいエネルギーはなく、火薬陰謀事件記念説教の型どおりの形式に従って説教を行っている感が強い。この説教で最も問題なのは火薬陰謀事件実行犯、つまりジェームズ一世殺害を企てたジェズイットへのアンドルーズの態度である。「ルカ伝」解釈にもあったように、アンドルーズはサマリア焼却を提案するヤコブとヨハネをイエスが叱責したことに触れている。このサマリア焼

却事件は火薬陰謀事件に適応すればどうなるのか。アンドルーズは弟子のヤコブとヨハネをジェズイットとし、サマリアを国会議事堂とした。ヤコブとヨハネはイエスから叱責を受けるが、彼らは本当の意味でまだイエスを理解していない。彼らは人の子イエスへの侮辱に腹を立て、サマリア焼却を提案するだけである。これを国会爆破事件へ移行したらどのような意味をもつか。ジェズイットもジェームズ一世との宗教的な違いから火薬もろともジェームズ一世を殺害する計画を立てた。しかし、アンドルーズから言わせればちょうどヤコブとヨハネが依然として「眼には眼を」的な旧約聖書思考にとりつかれていたと同様、ジェズイットもまた「愛」ではなく「眼には眼」での復讐しか考えていなかった。ヤコブとヨハネ同様、ジェズイットも大きな「無知」から事件を企てた人達であった。ジェズイットはヤコブとヨハネ同様彼らがいかなる霊から成り立っているか無知であった。ヤコブとヨハネはその後自らの無知を悟り、以後精力的にキリスト教のために奔走するが、ジェズイットはなおも「無知」のままイギリスを含めヨーロッパ社会に混乱を引き起こすだけであった。ヤコブとヨハネの「無知な崇拜」「盲目的信仰」「盲目的服従」や彼らの「無知」ゆえの「残虐な行為」はすべてそのまま火薬陰謀事件のジェズイットについて言えることであった。説教における適応は一応成功しているように見えるが、また無理なところがあるのも否定できない。それはヤコブとヨハネがジェズイットとなり、サマリアがジェームズ一世ともなるからである。旧約聖書からの説教ではこの適応はうまくいっていた。ジェームズ一世がダビデやソロモンやイエスに適応され、その適応は追従的演出の印象も与えるが聴衆への効果は大きかったが、「ルカ伝」からの説教では聖書のジェームズ一世への適応がうまくいっていない。これがこの説教が成功したとは言えない理由の一つである。

もう一つ、「ルカ伝」の火薬陰謀事件への適応を考えた場合、イエスを冷遇するサマリア人にもサマリア焼却を提案するヤコブとヨハネにもイエスは激怒しない。イエスの「敵」に対する愛は火薬陰謀事件を考える場合には国会爆破事件実行者への愛となってくる。つまり国会議事堂爆破もろともジェームズ一世関係者をすべて殺害するという前代未聞の凶悪事件を企てたジェズイットへ慈悲である。事件の首謀者ロバート・ケイツビーは追撃隊により殺害され、実

行犯のガイ・フォークス等事件関係者は処刑されたことを考えればこの「敵への愛」は事件の歴史的事実を無視し、国民感情を逆撫するような行為となる。Novakはこの説教におけるアンドルーズの激しい反カトリック教的感情を指摘しているが⁽¹⁹⁾、「激しい」という表現にはやや疑問である。説教において反カトリック教的な感情は知ることができるが、それほどの強さは感じられないからである。逆に Ferrell は、説教におけるアンドルーズの反カトリック教、反ジェズイットの態度は冷えており、ジェームズ一世期の穏健さについてあいまいな言語を使用し続けることをアンドルーズは認めている、と言っている。そしてアンドルーズのこの説教はジェームズ一世側とジェズイット側との間の論争時代の終焉の前兆となっているとも言っている⁽²⁰⁾。「ジェームズ一世期の穏健さ」とはジェームズ一世が事件発覚4日後の国会演説でカトリック教徒すべてが事件に関わってはいなかったという理由で事件に無関係なカトリック教徒に慈悲深い態度を示したことに言及している。「あいまいな言語」とはアンドルーズがジェームズ一世の敵であるジェズイットに対してのどっちつかずの態度を意味しているが、それはいたずらにジェズイットを刺激させない安全策でもあった。確かにアンドルーズは説教においてサマリア人焼却を認めず、彼らにすら救いの道があることを示唆するイエスの存在を重視していることから理解できるように、敵に対する慈悲が顕著となっている。しかしまた他の箇所ではジェズイットやカトリック教会への批判も行っているので、アンドルーズのジェズイット・カトリック教会への二面性から我々はアンドルーズの真意はどこにあるのかと問わざるをえなくなってくる。McCulloughはこのようなジェズイットへの二面的な態度は実はジェームズ一世の二種類のカトリック教徒観、即ち穏健なカトリック教徒と過激なカトリック教徒分類によると言っている⁽²¹⁾。火薬陰謀事件後にジェームズ一世が国内のカトリック教徒に課した「忠誠の誓い」では穏健なカトリック教徒はその誓いに同意したが、過激な一派は強硬に反対した。アンドルーズは「ルカ伝」による説教では特にカトリック教徒を穏健派と過激派に分類はしておらず、McCulloughの指摘には幾分無理があると思われる。ただ言えることはアンドルーズの説教はジェズイットに対しては慈悲の態度を見せていると解釈できながらも他方では彼らを批判するとい

う二面的態度を示していることである。ジェームズ一世とジェズイットとの論争がこの説教をもって終焉に向かうのか否かは疑問の余地はあるが、アンドルーズの「ルカ伝」説教は総体的にはカトリック教への批判よりイエス精神へより大きなウエートを置いていることは確かである。ヤコブとヨハネのサマリア焼却を叱責し、サマリアを焼却から救出したイエスの姿は「滅ぼすためではなく救うため」のイエス像であり、イエスを冷遇したサマリア人に対してすら暖かい慈悲を示すイエスである。そのサマリア人が火薬陰謀事件のジェズイットに適應されるときジェズイットに対してすら慈悲を示すということになる。用意周到な御用説教家のアンドルーズがこの大胆な適應の示唆する敵への慈悲に気づいていないはずはないし、また、説教を聞いていたジェームズ一世もそれを理解しなかったはずはない。ところが、ジェズイットにも慈悲という「ルカ伝」を基にしたアンドルーズの説教が当時それほど物議を醸し出したという記録はない。ジェームズ一世や王と共にアンドルーズの説教を聞いた人達がどのような印象を説教から得たかは定かではない。ただ興味深いことはアンドルーズが「ルカ伝」に基づく説教を行った前年1608年にジョン・キング (John King) が同じく火薬陰謀事件説教を行っているが、そこでキングはジェズイットを激しい口調で攻撃していることである⁽²²⁾。ジェームズ一世を喜ばせようとの一心からだったかキング自身の本音かははっきりしないが、キングのジェズイットへの憎悪が如実に描かれている説教である。アンドルーズとキング、柔と剛である。ところが柔のアンドルーズはその後トントン拍子に出世の階段を上り、彼は1618年まで合計10回の火薬陰謀事件説教と1607年から1623年まで8編のガウリー陰謀事件記念説教を担う大役を務めることになる。彼はジェームズ一世の寵児ともいうべくジェームズ一世期を代表する説教家になった。ということはアンドルーズの「ルカ伝」による説教は想像するほどの衝撃をジェームズ一世には与えはしなかったということであろう。ジェームズ一世は何よりも平和を愛好した王で、*The Peace-maker, Rex Pacificus* とも呼ばれた。アンドルーズはそのようなジェームズ一世の一面を意識して「ルカ伝」を基にして説教をおこなったと考えることができよう。とすればアンドルーズが火薬陰謀事件説教にあえて「ルカ伝」を選んだ理由も自ずと明らかになってくる。「ルカ伝」説教

はアンドルーズのしたたかな計算づくめのジェームズ一世への態度が読みとれる説教で、一見不成功に見えながらもアンドルーズは自らの目的を十分に果たしたと言えることができるであろう。

むすび

アンドルーズの「ルカ伝」説教は彼にとっては3番目の火薬陰謀事件説教である。それまでの彼の説教や他の説教は旧約聖書を基にして火薬陰謀事件説教を行っていた。1609年の3回目の火薬陰謀事件記念説教でアンドルーズは聖書の一節を旧約聖書から選ばず、新約聖書から選んだ。火薬陰謀事件は(1)ジェームズ一世の救出(2)救出の喜び(3)事件の極悪さ(4)神の慈悲、これら4つの部分から成り、併せて王の神聖さと王の神への奉仕が付け加えられるのが定石であった。これらの点を旧約聖書から選べばそれらは火薬陰謀事件にうまくあてはまる。なぜかと言えばユダヤ人の苦難の歴史にジェームズ一世が直面した火薬陰謀事件がうまく重なるからである。火薬陰謀事件説教のほとんどは旧約聖書の一節を基にしている理由も容易に理解できる。そのほうが説教家としても説教をするのがはるかに容易であった。ところが新約聖書を基にして説教をすればその主題はユダヤ人の苦難の歴史よりも救世主イエスの「愛」とならざるをえない。アンドルーズの「ルカ伝」説教はまさしくイエスを侮辱したサマリア人へのイエスの愛、慈悲が大きな特徴となっている。だから「ルカ伝」を火薬陰謀事件へ適応する場合、その適応がうまく機能しないという欠点が生じてくるのである。その意味ではアンドルーズの「ルカ伝」による説教は成功したとは必ずしも言えない。それまでの火薬陰謀事件説教は事件の首謀者ジェズイットを徹底的に攻撃し、ジェームズ一世の奇跡的救出を声高らかに賛美し、ジェームズ一世への神の慈悲に感謝するのがお決まりの説教であった。それはまた神から特別な加護を受けたジェームズ一世への賞賛ともなり、ジェームズ一世と神との密接な関係への賞賛ともなる。ところが「ルカ伝」による説教家ではジェズイットへの容赦のない弾劾やジェームズ一世の奇跡的救出を他の説教家のように劇的に述べることはない。アンドルーズの冷静な態度が顕著な説

教となっている。確かに上記の4点についてアンドルーズは触れてはいるが、感情的にまた扇情的に述べはしない。説教のテーマはあくまでもイエスが中心である。なぜアンドルーズが「ルカ伝」を説教の主題に選んだのかその理由をアンドルーズは明確に述べてはいない。上でも述べたようにアンドルーズはジェームズ一世の慈悲心を誇張し、王の平和への強い願望を披露したかったのかもしれない。従来火薬陰謀事件説教とは異なる聖書を題材にしてジェームズ一世のジェズイットへの新しい態度を示し、ジェームズ一世とジェズイットとの敵対関係に和解の兆しを見つけようとしたのか、その真意は定かではない。「ルカ伝」を基に説教するのであれば、当然ジェームズ一世も聴衆もイエス→ジェームズ一世という適応を期待したはずであるが、アンドルーズはそれを行ってはいない。ジェームズ一世を喜ばせるのであればイエス→ジェームズ一世としてもよかった。そうすれば「破壊するためではなく救うために」この世に現れたイエス像が *Rex Pacificus* としてのジェームズ一世と一致してくる。しかしアンドルーズはジェームズ一世→サマリア人とした。Ferrell は、「ルカ伝」による説教は両者の論争の終焉の前兆であると言ったが⁽²³⁾、それは「ルカ伝」におけるイエスの慈悲を考慮してだろう。しかしアンドルーズはこの後も「忠誠の誓い」論争に加わり、ジェズイットへ反論を試みている。いずれにせよ「ルカ伝」説教によりアンドルーズはジェームズ一世から不評を買ったという事実はなかった。自らを学者、神学者と見なし、説教好きで聖書にも詳細な知識を持つジェームズ一世は自分の気にくわない説教には途中で説教を中止させたりしたこともあるほどだった。「ルカ伝」説教にジェームズ一世からの特別なコメントがなかったということは案外ジェームズ一世は「ルカ伝」説教に同調するところが多くあったのかもしれない。ジェームズ一世は、「ルカ伝」説教は *Rex Pacificus* としてのジェームズ一世の一面を世に喧伝せしめる説教であったと内心では満足していたのであろう。不成功に終わったと思われる「ルカ伝」説教もジェームズ一世に訴えるところが多く、それが御用説教家としてのアンドルーズの評判を益々高めていくことになった。

注

- (1) Thomas Stephen Nowak, “Remember, Remember the Fifth of November”: Anglocentrism and anti-Catholicism in the English Gunpowder sermons, 1605-1651’, Ph. D. thesis, State University of New York at Stony Brook, 1992, p. 349-350.
- (2) 高橋正平, 「William Barlow の Gunpowder Pot 説教について—ジェームズ一世の国会演説との関連において—」新潟大学英文学会誌 第29号, 平成14年12月, pp. 13-33.
- (3) 高橋正平, 「Lancelot Andrewes と ジェームズ一世: The Gowrie Conspiracy 説教とThe Gunpowder Plot 説教を中心にして」人文科学研究 第114輯, 平成16年2月, pp. 1-35.
- (4) 高橋 正平「平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書 平成14年3月 pp. 118-125」
- (5) *The Works of Lancelot Andrewes*, ed. J. P. Wilson and J. Bliss (Rpt. New York: AMS Press, 1967) Vol.IV, p. 248. 第4巻にはガウリー陰謀事件記念説教8編と火薬陰謀事件記念説教10編が収録されている。本論で使用するアンドルーズの1609年の火薬陰謀事件記念説教は本全集版からで、以下Worksと略記する。アンドルーズ研究書に関しては以下があるが、本論で扱う3番目の火薬陰謀事件記念説教を直接論じている研究書はない。

Rev. Arthur T. Russell, *Memoirs of the Life and Works of the Right Honourable and Right Re. Father in God Lancelot Andrewes, D.D. Lord Bishop of Winchester* (Cambridge: J. Palmer, 1860)

Paul A. Welsby, *Lancelot Andrewes 1555-1626* (London: SPCK, 1958)

Maurice F. Reidy, S.J., *Bishop Lancelot Andrewes: Jacobean Court Preacher* (Chicago: Loyola University Press, 1955)

Nicholas Lossky, *Lancelot Andrewes The Preacher (1555-1626)* (Oxford: Clarendon Press, 1991) なおNowak は上記博士論文 pp. 86-92でこの説教を取り上げている。アンドルーズの火薬陰謀事件記念説教におけるジェームズ一世の王権神授説擁護については William Tate, *Solomonic Iconography in Early Stuart England: Solomon's Wisdom, Solomon's Folly* (Wales: The Edwin Mellen Press, Ltd., 2001), pp. 62-72を参照されたい。

火薬陰謀事件については以下の書が参考となる。特に Fraser の書は事件の全貌を余すところなく論じている。

Mark Nicholls, *Investigating Gunpowder Plot* (Manchester: Manchester University Press, 1991)

Alan Haynes, *The Gunpowder Plot: Faith in Rebellion* (London: Grang Books plc, 1994)

Antonia Fraser, *Faith and Treason: The Story of the Gunpowder Plot* (New York: Doubleday, 1996)。これには加藤宏和訳『信仰とテロリズム 1605年火薬陰謀事件記念』（慶応義塾大学出版会，2003）がある。

- (6) *Works*, p. 252.
- (7) *Works*, p. 253.
- (8) *Works*, p. 250.
- (9) *Works*, p. 250.
- (10) *Works*, p. 250.
- (11) *Works*, p. 254.
- (12) *Works*, p. 255.
- (13) *Works*, p. 243.
- (14) *Works*, p. 243.
- (15) *Works*, p. 242.
- (16) サマリア事件と火薬陰謀事件記念との関係では、イエスを無視するサマリア人→ジェームズ一世敵対者ジェズイット、イエス→イギリス人（ジェームズ一世）という適応も考えられる。
- (17) *Works*, p. 256.
- (18) *Works*, p. 259.
- (19) Nowak, p. 88.
- (20) Lori Anne Ferrell, *Government by Polemic: James I, the King's Preachers, and the Rhetorics of Conformity, 1603-1625* (Stanford: Stanford University Press, 1998), p. 104.
- (21) Peter E. McCullough, *Sermons at Court: Politics and religion in Elizabethan and Jacobean preaching* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), p. 123.
- (22) McCullough, p. 124.
- (23) Ferrell, p. 104.